

ぼくとおさかな

植田 樹

島根県立松江工業高等学校 定時制課程

「ごぼごぼ…。」

深い、深い、海の中に僕はいる。

周りには、何もない。ただ、暗い空間が広がっているだけだ。

息が苦しい。「おさかな」なら平気だろう。

「どうして、僕は「おさかな」になれないのかな…。」

誰にでも長所がある。そして短所もある。完璧人間なんてこの世には存在しない。僕も、「短所」という肩書きを背負っている。にも関わらず、みんなとは「違うモノ」とされてきた。それでも僕は、一緒になれなくても、近くにはいたい。そう思い、僕は「人」には過酷な海に飛び込んだ。

「おさかな」はスイスイと泳いで行く。速く、綺麗に、強い逆流の中でも負けることなく泳いで行く。同じように僕も精一杯泳ぐが、先に見える背がだんだんと豆粒のように見える。「大丈夫？一緒に行こう？」と僕を心配して、一緒に泳いでくれる「おさかな」もいる。しかし、僕に合わせる事が、だんだんと面倒になり、少しずつ僕のもとから去っていく。そして、再び孤独となる。

それでも「おさかな」に追いつこうと努力するが、限界が来てしまった。息ができない。苦しい。辛い。一緒になれないのはもっと苦しいし、辛い。「僕」はどうするべきなのか。何が最善なのか。わからない。

「もう、このまま沈んでしまおうか。」

もう何もしたくない。無駄なことは諦めよう。静かに、時間が過ぎていく。

そんな時だった。僕に似た、「おさかな」がいた。

それは、他の「おさかな」よりも遅く、がむしゃらに、藻掻くように泳いでいる。その姿は、不格好ながらも、自由で、楽しそうに見えた。

「置いてかれて辛いのか？無理してまで頑張るのは苦しくないのか？」と僕は問う。

「おさかな」は言った。

「無理に合わせてようとすると苦しいよ。どんな状況でも、自分にとっての「泳ぎ方」が大切だよ。泳ぎ方に正解はないだろ？」と。

忘れていた。「人」は一人ひとり、「違う」生き物だ。それは「おさかな」も同じことだ。100%一緒じゃないなら、合わないところもできてしまう。

「完璧人間なんてこの世には存在しない。」

「おさかな」に囚われ過ぎていた「僕」は、100%になろうと自分自身を苦しめていた。「僕」が「僕」を見ていなかった。

自分も、相手も100%合わせれることなんてできない。0.01%でも合うことができる。それだけでも凄いことだ。合うのが正義じゃない。そして、合わせれないのが悪でもない。「泳ぎ方」に正解はない。

誰かの「泳ぎ方」を不正解だと言う奴が不正解なんだ。

僕にとって、何が合うのか。それは一番の理解者である僕自身が決めることだ。「誰か」が勝手に決めたことに合わせる義理はない。

きっと、この先、僕の「泳ぎ方」を否定されることが多々あると思う。それでも、僕は泳ぐことを決して止めない。止めてしまえば、僕が自分自身を否定することになってしまうからだ。どんな状況でも、僕が速く、遅く、丁寧に、がむしゃらに泳ごうとそれは、僕が進むのに必要なことだから。

どんな逆流も僕を止めることはできない。

僕は、この広大な海を自由に泳いで行こうと、心に決めた。